

1. 登山の記録

コングールⅣ峰初登頂

高橋清輝

目的と教育理念

“より高く、より困難を求めて”成しうる可能性に、自らが汗水流し努力してチャレンジし、目的を達成したことによる感動の尊さ誇りを心から味わってほしいと云うことが私の願いで、幻想のヒマラヤを描きつづける心に内在する夢を実現可能にしてあげたいと指導してきました。

高校山岳部の活動は、教育としての山登りを原点とすることは申すまでもなく、自分の山好きを願として具現化したいからではない。山イコール自然は、人間の力を超えた偉大な教育者であり、山登問登りを通して人間の本性が呼びさまされ、淘汰される。したがって山は人間にとって価値の高い教育の場となりうる、と云うのが私の理念なのです。

しかし、朝シャン時代の子にスタートラインにつかせることはきわめて難しいことで、魅力ある目標設定は、危険をとり除くことと共にリーダーの最も重要なことだと認識しています。すなわちゴールに魅力を感じれば現代っ子でも30キロのレンガを担いでのボッカ訓練も、厳冬期の合宿も十分に耐えられることを実証しているのではないのでしょうか。このような理念のもとに過去6回の海外遠征登山を実施してきました。

過去の海外遠征登山の記録

・第一次(1972年 台湾玉山)

日本の高校生として初の海外遠征であり、主峰、北峰、北北峰に



ピークを目指して(5,500m第Ⅲキャンプを出発)

1. 登山の記録

17名全隊員が登頂。

・第二次（1975年 韓国雪岳山） 韓国山岳会の協力を得て7名が登頂。

・第三次（1978～79年 ヒマラヤ・ゴーキョピーク）

高校生として世界初のヒマラヤ遠征を計画、12名がピークに立った。

・第四次（1982年 カナダロッキー・ツインズ北峰）

アサバスカ氷河からコロンビアアイスフィールド最奥に位置するツインズ北峰にサポートなしの自力で15名登頂。

・第五次（1989年 ヒマラヤ・チュルー南東峰）

アンナプルナ山群のチュルー南東峰を目指し三つの雪壁をクライミングし、隊員9名がヒマラヤの高峰に登頂。西ドイツ隊につづく第二登、日本人としては初登頂。

・第六次（1992年 アラスカ・サンフォード）

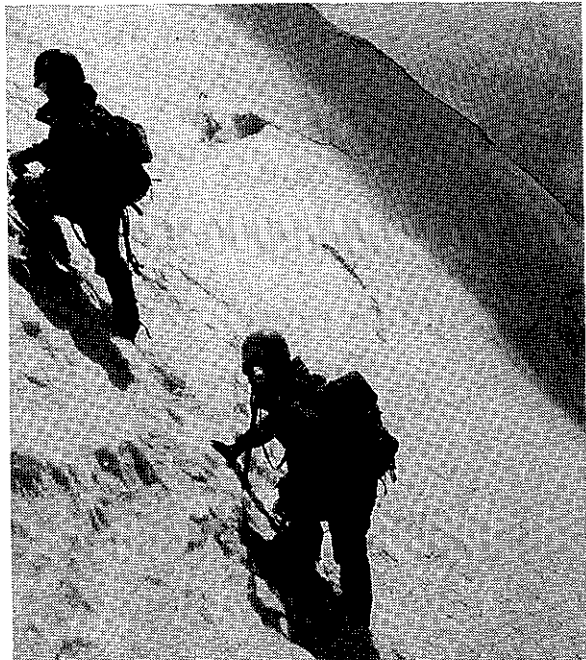
北極圏に近いランゲル山脈第二の高峰に挑戦。ピーク直下にAC設営も猛吹雪に遭遇、安全第一を考え無念の撤退。

第七次遠征実現までのアプローチ

・目標決定と偵察——ワスカラン、ムスターグアタ、チャクラギルも候補に検討したが、コングール山群唯一の未踏峰第Ⅳ峰を選定、すでにイタリア隊や日本の山岳会からの打診ありとのことで急遽仮申請し、昨年夏の偵察山行で最終決定した。

偵察では、隣のコクセル峰に登頂した山形大山岳部OB会隊の意見も参考に氷河を登りつめ北稜からのルート进行调查したが、取付きがほぼ絶壁に近い状況で不可能と判断、南稜ルートをとることに決めた。

・準備とトレーニング——八ヶ岳、南アルプスを中心に積雪期合宿を数回実施し、氷雪技術はジョウゴ沢を中心に訓練。学内ではポッカ訓練やマラソン、筋力トレ等を重点に練磨し、岳連の研修会にも出席し講習を受けた。



ピーク直下の雪壁を登る隊員

1. 登山の記録

隊構成

登山隊長 高橋清輝（部顧問，教諭）

OG 4名（全員海外登山経験者）

現役 7名（3年 4名，2年 3名）

他に，写真及びビデオ担当 2名と撮影サポート 2名。中国側から，連絡官，通訳，炊事員計 4名。

総数 20名（内，隊員 14名）

行動概要

7/23 全隊員成田空港から北京入り

／24 大使館挨拶後，午後の便でウルムチ入り。新疆登山協会の歓迎会に出席

／25 空路カシュガル入り

／26 カシュガル登山協会で隊荷点検後，マイクロバスで登山口のカラクル湖へ

／27 湖畔のパオに宿泊，近くの丘に高度順化トレ，キャラバン隊荷準備

／28 カラクル湖（3,600m）から隊荷は荷役動物（馬 6頭，ラクダ 28頭）に，隊員は徒歩でサ
シュグキー川を二度渡渉し 4,250m の地点に BC 設営

／29 BCにて隊荷点検，分担，偵察準備

／30 ルート工作隊 BC-CI 設営-BC

／31 本隊 BC-CI 荷上-BC

ルート隊 CI（4,780m）

入り

8/1 本隊 CI 入り

ルート隊 CI-CII-CI

／2 本隊 CI-CII 荷上-CI

（1名体調不調で BCへ

下山）

ルート隊 CII（5,080m）

入り

／3 本隊 CII 入り

ルート隊 CII-CIII-CII

／4 本隊，ルート隊共に CIII

（5,055m）入り

／5 本隊，ルート隊共に CIV

（5,560m）入り



アタックキャンプ（6,000m）

1. 登山の記録

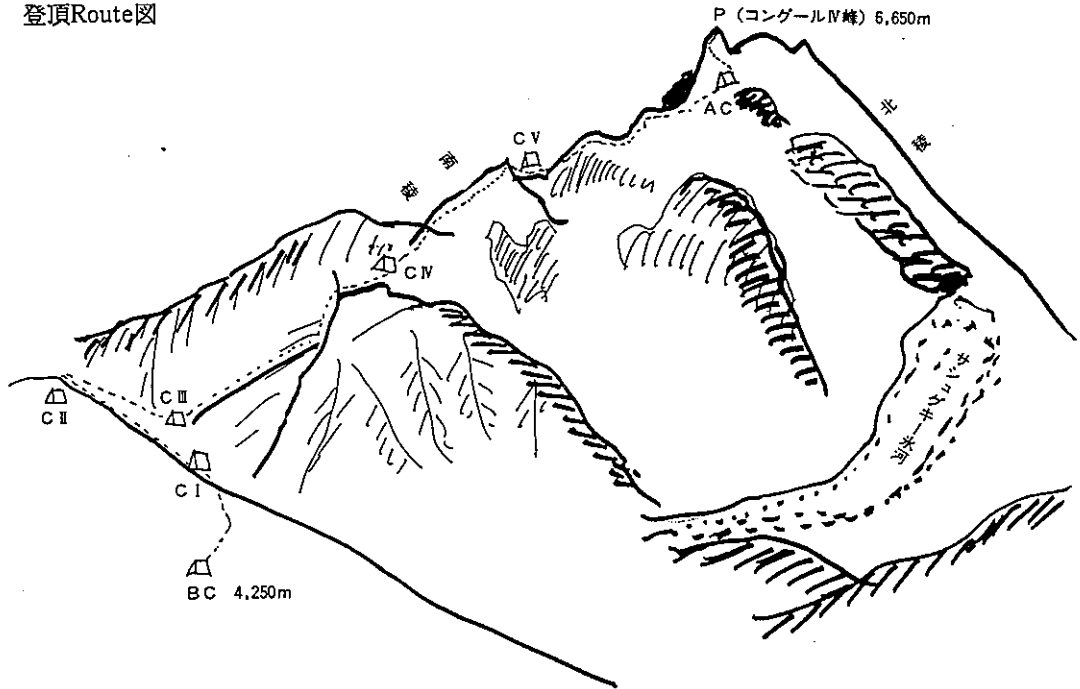
- 8/6 ルート隊CV-AC-CW
- ／7 本隊，ルート隊共にCV（5,880m）入り 1名高山病でCIに下山
- ／8 本隊，ルート隊共にAC（6,000m）入り
- ／9 ルート隊AC-ルート工作-AC
- ／10 第1次アタック6,400m地点でクレヴァス等に阻まれ断念，ACに戻る
- ／11 ルート隊AC-別ルート工作-AC
- ／12 第2次アタック 隊員11名登頂に成功（1名不調でAC待機）
- ／13 AC-CV-CW-CIIIへ下山
- ／14 CIII-CII-CIへ下山
- ／15 CI-BCへ下山 全隊員合流
- ／16 BCにて休養
- ／17 BCから登山カラクル湖へ下山
- ／18 カラクル湖滞在，隊荷整理
- ／19 マイクロバスでカシュガルへ，政府関係者や登山協会により盛大な祝賀会
- ／20 空路ウルムチへ，新疆登山協会による祝賀会，初登頂証明書を受け取る。
- ／21 空路北京へ
- ／21～23 北京滞在
- ／24 空路成田空港へ（解散）



コングールⅣ峰のピークに立つ

1. 登山の記録

登頂Route図



ルート概要及び登攀活動

- ・BC カラクル湖より8時間を要し台地に設営、眺望よく最適だが、飲料水は泥水のため沸騰させて使用。
- ・BC-CI-CII ガレ、ザレ場の足場の悪い急登が続く。CI, CII共に雪溪があり流水もみつかり飲料水確保ができた。方々で雪崩の発生があり不気味。
- ・CII-CIII 登山口からの遠望では尾根つづきに見えたが実際は切れ落ち約100m谷におりて登り返すアルパイトとなり懸垂下降でCIIIへ。以後毎晩約30センチの積雪ありルート工作のトレースは消されたが赤布つきの標識竹は有効であった。
- ・CIII-CIV-CV 約40度の雪壁がつづく。急斜面ではスノーバーを使用しフィックストロープを張りユマールで登る。行動中視界20m以下になることもある。途中数ヶ所クレヴァスもあり通過に時間を要した。
- ・CV-AC CVから直接稜線伝いにピークに登るルートは、ナイフエッジ、雪庇等で技術的に困難なので、北面を大きくトラバースレピークの裏手に回りAC設営。-10度。
- ・第1次アタック ナイフエッジを避けて三角錐のピークに取りつくルートを選んだが45度以上の氷壁となり、スノーバーは使用不可、アイススクリュウ、アイスハーケンも不足気味で、アイスハンマーを駆使したが無理と判断。ルート変更して大きくトラバース気味に西稜の雪壁を登りつめたが最後は大きなクレヴァスに行手を阻まれ、1回目は時間切れ。

1. 登山の記録

・第2次アタック（登頂成功）

ACからはほぼ真正面の雪壁を登りつめてピークに出る第三のルートを選ぶ。約2時間かけて雪の急斜面を登るとピーク直下の稜線からの台地に出る。クレヴァス帯を慎重にこえて、50度以上ある三角錐のとんがり部分の氷壁の急登となり、最後の力をふりしぼって12時45分コングールⅣ峰のピークに立った。天候は不安定で、ピーク到達頃から下山まで小雪降りしきり、気温は-13度。AC帰着は17時43分。ピークでは「登頂成功しかし日本への連絡は無事ACに戻ってから」が無線のコールだったが、ACでは全員が嬉し涙でBCに登頂成功を報告した。

遠征後記

・登頂成功の主因

隊員全員の目的意識とチームワークが、より困難（クレヴァス、氷壁、雪壁）と、より高く（高度障害）を克服したのではないのでしょうか。最近大学進学のみでなくスポーツ界でもエリートのレールが敷かれつつある感がしますが、普通の学校の、普通の女の子が達成したこのさわやかな記録は、多くの若者に青春メッセージ的な役割を果たしたと思っています。

・山名と高度

山名は、中国の地図では無名峰であるが、過去に山群の左から順に呼称されていたコングールⅣ峰の使用を新疆登山協会より許可された。現地ではサシュグキー氷河の名をそのまま山の名称としてサシュグキーピークと呼んでいる。また、登山協会では初登頂を記念して「立川峰」と命名することを政府に申請手続中。

高度は、中国の地図では6,500mとなっているが、外国の文献から6,650mが正確とされ中国側の了承を得てこの標高としたが実際ピークでは6人の隊員が高度計を持参し測定したが、各々高くも低くも異なって記録されたためこの標高で報告した。

・記録

中国の高峰で女性が初登頂者となったのは17年ぶりで（コングール山群では初めて）しかも女子高校生と云うことで、「快挙」と高い評価をいただいた。

（立川女子高等学校山岳部顧問）